今回は、メモ＋TEDのながらでもとくに「本の歴史」を扱っていこうと思っている。

本は紙が発明される前にもあった。紙のかわりのさまざまな土地の材料を使ったもので、形のいろいろだった。

世界で最も古い文明は、ナイル川のほとりのヒエログリフ文明、チョウダ（メソポタミア）とインダス川のほとりのくさびがたアルファベット文明、黄河のほとりの黄河文明である。

それぞれ自分たちの文字をもっていたが、さまざまな記録を、“何か”に書きとめた。これが本の起源である。

草でつくられた巻き物の本

紙のことを英語でpaperというが、これは五千年前の紙「パピルス」からきている。パピルスはナイル川のほとりに茂るカヤツリグサの一種、パピルス草の茎で作られた。

2

パピルスの作り方

一、茎の皮をむいて、髄（ずい）をうすく裂く

二、たっぷり水分を含ませてから、ローラーをかけてのばす

三、再び二、三日水分を含ませてから、縦横交差するように並べ、重しをかけて乾かす

占代のパピルス一枚は、縦が三〇センチくらいのやや横長だったが、折り曲げに弱いので、綴じ目には向かない。そこで何枚もつなぎして、長いパピルスを作るようになった。

パピルスの本は、今から四〇〇〇年以上前から、約三〇〇〇年もの長い間つくられた。

粘土板でつくられた巻き物の本

メソポタミアでは、草ではなく、土で本をつくった。チグリスとユーフラテスの二つの川が上流からこまかいこな土を運んできて粘土の層ができた。その粘土に紀元前三二〇〇年ごろから絵文字（ものごとを表す記号）が記されるようになり、紀元前二四〇〇年ごろに楔形文字になった。

“書く”ことばとその業を三角形に切ってとがらせた先端を柔らかな粘土に押しつけ、焼（や）けばこれは五種類のくさび形の組み合わせでいるので楔形文字（くさびがたもじ）とよばれる。

文字を書くのは簡単ではなく、少なくとも粘土板に文字を書く修業をした書記の仕事だった。

4

1つの文字を楽らかな粘土の板に書き、自然に乾かして粘土板を作った。とくに大事なものは窯で焼いて、硬く丈夫にして保存した。

紙の誕生

紀元前二世紀のエジプトのプトレマイオス王朝が一〇〇万巻もある世界一大きな図書館があった。ここでつくられたパピルス本（現ルーロ・ベルガモ市）でもっとも良質なものとされ、プトレマイオス王朝は、パピルスの輸出を禁止してしまった。

困ったペルガモンは代わりに本の材料に使ったのが、ヒツジやヤギの皮から作る羊皮紙（ヴェラム）である。裏表両面に書けるし、折りたたんで綴じることもできるので、今のような本の形が生まれた。

羊皮紙は、西洋では中国から紙の製法が伝わって、くまなく、一五〇〇年以上も使われた。

木の葉に書かれた本

インドやスリランカ、タイなどでは、文字や絵をヤシ科の木の葉にかいた。大きなは、幅四～八センチ、長さは四〇センチ以下のものから一メートルもあるものまであった。

短いものは真ん中に一つ、長いものは二か所に穴をあけて、紐を通し、板でときどき挟んで綴じた。

5

版じから木へ

メソポタミアでは、粘土板に文字を書いたあと、焼いてこわれないようにした。

木のふだにかかれた本

中国では古くから、骨や甲羅、銅、石、木、竹、絹と、多くのものに文字や絵をしるしてきた。

三千数百年前には、カメの甲羅やウシの骨などに漢字の祖先である甲骨文字をきざんだ。

次に、木や竹のふだ、つまり木簡（もっかん）、竹簡（ちっかん）を使った。木簡（竹簡）は細長い板で、文章はだいたい一枚に一行ずつ書き、入らないときは広い板にした。長い文章は何枚もの木簡に書き、紐で編んでまとめて、本にした。

木は重く、扱いが大変だった。絹も使ったが高価だった。木と絹、その両方のよいところをあわせもったのが、一大発明の「紙」だった。

6

紙の誕生

発明者は不明だが、蔡倫（一世紀中頃～一二一年？）が以前からあった紙の作り方を改良発展させた。それまでの紙は、古真綿のようなもので物を包んだりすることに使われたようだが、蔡倫の紙は原料を工夫した。麻くず、魚の網、ぼろ布などや、植物の皮も入れて、「石臼」でそれをくだき、「すのこ」ですいて作った。

日本では中国と往来があったので早くから紙を知っていた。六世紀には中国から仏教が伝来する。お経が書き写されるようになると、」なくてはならないのが紙だった。七世紀から日本国内での製紙も盛んになり、八世紀から九世紀にかけて、日本独自の作り方、〝流しずき〟による「和紙」が生まれた。

印刷の誕生

印刷のみなもとは、①ハンコ（印章）をおす、②拓本をとる、③型を使って模様を染める、というようなことだったといわれる。

今のこっている世界最古の印刷物は日本の八世紀のお経である。七六四～七七〇年の六年間で一〇〇万枚も印刷された。

7

木版印刷から活字印刷本へ

ヨーロッパに中国から紙が伝わるのに一五〇〇年かかった。ヨーロッパの木版印刷は一四～一五世紀ころに始まった。やがて何枚かの版画をまとめた木版本が作られた。

一五世紀初めにドイツのグーテンベルクが活字による印刷を考えだした。字の線がへこみになった母型に訛りを流し込んで、刷るところが凸になった鉛活字を一字一字作る。それを組み合わせ、ぶどうしぼり機から思いついたプレス式印刷機を使って紙に刷るという方法である。

8

後期〈情報編集論〉第9回　20121121

メディア史概論

前田年昭 t.mae@kobe-du.ac.jp

草でつくられた巻き物の本
粘土でつくられた本
皮にかかれた本
木の葉にかかれた本
木のふだにかかれた本
紙の発明
印刷の発明
木版印刷から活字印刷本へ

くむ【組む】①（自五）同じ目的（共通の利害）のために、行動を共にする。②（他五）**1**何かと何かを交差させて、離れないようにする。**2**一定の手順に従って部分（部品）を少しずつ結びつけたり、動かないように合わせたりしながら、その積み重ねで、」やがて一まとまりのものを作る。**3**一つの組織（体制）を作る。

〔『新明解国語辞典』第六版〕

【参考文献】
辻村益朗『本のれきし５０００年』福音館書店、一九八九年
『古代日本　文字のある風景　―金印から正倉院文書まで―』国立歴史民俗博物館